

船上山鎮守の森再生プロジェクト 2012年7月22日



主催：特) 北海道プラットフォーム北海道

助成



1. 評価の高い小樽の植樹祭

今年も小樽での「北海道千年の森プロジェクト」の植樹祭が始まった。

今年は「ふるさとの森づくりプロジェクト」と称して、主催「NPO法人教育プラットフォーム北海道」、「北海道千年の森プロジェクト」と『毎日新聞社』が共催となる。

毎日新聞社は「水と緑の地球環境づくり」に力を入れているだけに、私たちの植樹祭に全面的に応援して下さっている。毎日新聞社の山本悟部長の陰の力はとても大きい。嬉しいことに「北海道千年の森プロジェクト」のこれまでの実績が評価されて、日本財団からの助成が得られ、今年も住吉神社の船上山の鎮守の森の植樹も計画通り実行されたのだ。

2. 植樹祭の陰の力

植樹する船上山は、今年で4年目を迎える。古い木が倒されて、いつものように荒木副理事長が代表を務める創建社が宮脇昭先生の指導のもとマウンドを造ってくれている。



植樹するマウンドは年々山の上へ上へと上がっていく。それだけに植樹の場所も急斜面となっていく。昨年は雨降りの後だったので山へ上るのが滑って大変だったが、今年は遊歩道を整備し木のチップが敷かれていて歩きやすい。

植樹祭が成功するためには、植樹祭の日までの準備が大切になる。マウンドが急斜面だけに準備は大変な作業になる。

今年は7月19日・20日・21日と3日間にわたって準備が進められた。幸い好天に恵まれる。しかし、暑さが作業を更に厳しいものにしてくれる。

一日目は、今年も理事や会員の田中さん、渡辺さん、それにニセコから横山さんがやってくる。政寿司からもこれも毎年来てくれる鮪の目利きナンバーワンのたけちゃんこと“竹原さん”と若い職人さんが応援に来てくれる。また阿部建設、宮本土建からの応援が加わって力強い。フリーの応援には会員の皆様が来てくれた。そして準備にはなんとといっても小樽青年会議所の若いエネルギーが中心になる。今年も若い力が勢ぞろいだ。

作業はいつもの手順で行われる。マウンドを計って杭を打つ作業に、長さを計って縄つくりだ。藁が運ばれてくる、山のような藁をマウンドに敷きやすいように束を造る作業だ。一日目は荒木副理事長と田中理事の指導でスムーズに行われた。

二日目は、一日目と同様に山川副理事長の挨拶と小樽青年会議所高木理事長の挨拶から始まった。メンバーに会員の荻山さんが加わる。それに東京からボランティアの方も顔を出す。100人力の応援だ。

二日目の作業は、先ず旧堺小学校から苗を運んでこなければならない。これらは青年会議所のメンバーが車の機動を生かして人海戦術でやってくれる。

今日も昨日やり残したマウンドのくい打ちと縄を置く仕事だ。マウンドに雑草があるようなので、これらも引き抜いてしまう。作業は手慣れたものでスムーズに仕上がって行く。

マウンドの上に行くにしたがって景色がよくなって来る。船上山がこんなに高いとは景色を一望してわかる。この景色は、汗をかきながらの植樹の仕事をする市民に一服の清涼剤になるに違いない。今日は遠くに増毛連峰がうすぼんやりと見える。青い海に新潟へ行くフェリーが遠ざかって行く。やはり小樽の街はいいなと思う。そして住吉神社の敷地が小樽中心地にあって、鎮守の森としての役目を果たしていたこともよくわかって来る。

午後からの作業は藁を上まで運ぶ仕事だ。これは大変な作業になる。正に人海戦術だ。青年会議所のメンバーが心強い。作業は全員が分担して行う。先ず軽自動車に藁を積み込む作業から始まる。軽自動車は藁を積んで登れる斜面まで突っ走る。上りきったところで藁が下され、ここからは手渡しで藁がマウンドに積まれていく。汗がしたたり落ちるが山の上だけに風が心地よい。

次はマウンドの横に水を置く作業が待っていた。一輪車に水を入れる水槽を乗せて山を上る。普段一輪車を使うことなどないのと道幅が狭いので、結構大変な仕事だ。汗がしたたり落ちる。それでも仕事は順調に進んでいく。

ふと“縁の下の力持ち”という諺を思い出した。植樹祭に参加した市民の皆さんが植樹しやすいようにと頑張っているこの力は、正に“縁の下の力持ち”と言うのだろう。

毎年の植樹祭で思うことだが、植樹を終えて帰る人たちの満足そうな笑顔は、この前日までの作業があってこそ生まれるのだ。

住吉神社の境内に植樹祭の意義が書かれた大きな立札が設置された。これを見るときなぜ植樹が大切なのが良くわかる。そして昔から森と共生してきた先人の知恵の証が鎮守の森なのだと理解される。

三日目は、苗の種分けと最終点検だ。グリーンワールドから苗木が届けられている。この苗が森を造るのだ。一つ一つのマウンドのそばに『低木・中木・高木』の木が置かれることになる。作業が始められた。グリーンワールドの人たちの指示で種分けされていく。

作業は順調に進んでいく。

そこへ宮脇先生が到着する。先日テレビでお逢いした先生であったが、お元気そうなお顔を拝見できて嬉しい。それにしても実に過密なスケジュールの中を精力的に行動する先生に心打たれる思いだ。

先生に植樹の現地を見てもらうことにする。ところが低木が多すぎると指摘された。学校なら子どもたちが森を楽しむのに木の実がなったり、花が咲いたりする木も大切だが、

鎮守の森は高木が多くて良いと。しかし、この鎮守の森は市民の憩いの森となるように森に遊歩道を作り、遊歩道の回りには四季の花々が咲く低木を植える計画はご存知のはずなのに。

しかし、旧塚小学校の校庭にあるドングリの苗木を運んでくることになった。作業は一時中断して、トラックに積んでくるミズナラの苗木を待つことにした。

3日目の準備の作業にはまじえる会のメンバーに市民のボランティアの人たちの参加もあって、苗木が届いてからは順調な仕上がりを見せた。

この日の先生のスケジュールも忙しい。11時には“ウイングベイおたる”での開会式に出席しなければならない。

3. 歓声を上げる子ども達

ウイングベイおたるの責任者は中井先生だ。内科医の先生が司会進行を務めるところに小樽の良さがある。開会式は中央ステージで行われた。佐藤道議など来賓の皆さんが北海道千年の森の植樹祭を称賛して下さった。



中央ステージの周りには、子どもたちが喜びそうなお店が出ている。先ず【子供マーケット】【ビーズなどの手作り工房】【風船の魔法使いエリサ(バルーンアート)】【道産子スラプロ(子ども似顔絵)】そして【環境パネル展】だ。その横に苗木が展示され、募金のお願いと植樹祭参加予約と……。市民も毎日新聞社主催のハゲ山が緑の森に変わっていく様子がよくわかるパネル展や、小樽野草の会、そして後志振興局からもパネルが出展された。市民も足を止めて見てくれている。高島の環境にやさしいサラサラ石鹸の売り場もあったり、千年の森の会員の井形夫人の環境をモチーフした教育長賞受章の絵の作品が展示されている。同じく千年の森の会員の島牧村の杉山先生が展示した、島牧での環境保全の取り組みの写真展も見ごたえがある。

この会場には子どもたちが喜ぶようにと無料で“わたあめ”を提供されていて、井形夫妻がわたあめの器械を操作して作ってくれるのだ。私山川も70年ぶりでわたあめを食べることができた。すると「私にもいただけますか？」と見知らぬ老婦人も声をかけてきて、嬉しそうにわたあめを食べていた。『メダカのコタロウ劇団』が始まる。いつの間にかお子さん連れの人たちが集まってくる。劇団の若いメンバーの衣装に目を引かれたようだ。子どもたちが喜びそうなキャラクターが勢ぞろいだ。劇が始まる。大きな音響に大人の買い物客も足を止めている。



舞台の中央にアニメの劇画が物語を進めていく。劇団の声優たちの語り口が子どもの心を惹きつける。悪者たちに荒らされた森を自然の森に取り返す正義のキャラクターたちの活躍ぶりが音楽と声で語られていく。突然「この紋所が目に入らぬか」と水戸黄門張りの宮脇先生が現れる。物語は命を守り、命を育む森がいかに大切かを教えてくれる。

子どもたちが一番喜んだのはクイズだった。○×式のクイズだが、『山はみんなのもの、森も川もため池も田んぼもみんなのもの』というコタロウ劇団の劇を見ていたら、みんな正解になる。○になって正解になった子どもたちは楽しそうに歓声を上げる。この環境劇なら毎日このウイングベイおたるの中央ステージで開催されてもいいように思った。

4. 盛り上がる宮脇昭先生を囲んでの意見交換会

今年も意見交換会が“政寿司カモメ亭”で開催された。カモメ亭の中央ステージには、先日フジテレビの「プライムニュース」で報道された宮脇先生がスクリーンに映っていた。この時は元総理大臣の細川護熙氏も同席していた。3・11の大震災の復興について、瓦礫を有効に使った防災林造りがテーマだった。すでに宮脇方式で取り組んでいる宮城県の実例を図式にしてわかりやすく紹介していた。全く宮脇先生は時の人だ。本当に説得力にある番組の内容に多くの国民が関心を持ったに違いない。

今年の宮脇先生を囲んでの交流会には、毎日新聞社の斗ヶ沢本部長も出席された。毎日新聞社は【水と緑の地球環境プロジェクト】を立ち上げて、全国規模で植樹活動を支援してくれている。本当に素晴らしいことだ。今、地球環境問題に取り組まないと未来の地球はないと考えて、改めて毎日新聞社の慧眼に敬意を覚える。本部長の挨拶の中で、出身が赤井川村で小樽の潮陵高校卒業とお聞きし、一段と親しみを感じてしまう。

今年の植樹祭の主催は「NOP法人教育プラットフォーム北海道」だ。木下理事長に代わって藤田副理事長が挨拶をした。教育プラットフォーム北海道は職人の会を組織して、いろいろな場面で子どもたちのために活躍してくれている。本当に有難いことだと思う。小樽市からは横田市議会議長が出席してくれた。今日も元気な声での挨拶だ。いつも何事にも前向きで活動し、この植樹祭にも毎年のように参加して下さっている。横田議長の乾杯で前夜祭が始まった。

宮脇先生を囲むこの会は人生の面白さを感じてしまう。植樹の活動が無ければ全く未知であった人たちだ。それが和気あいあいと語り合い、笑いあって懇親を深めている。まるで木の年輪のように年を重ねるほどに信頼の輪が広がり、絆が深まっていく。それは今世界で一番大事なことをやっていると言う誇りが共有されているからだ。

市川さんの司会で自己紹介が始まる。毎日新聞の斗ヶ沢本部長と山本部長からは、全国の植樹活動を支援して多くの木を植えていきたいと地球環境にかける意気込みが感じてくる。横田議長と上野議員には、来年予定の奥沢水源地の植樹が成功するようにと政治的な面での活躍を期待され、二人の決意表明になってしまった。

青年会議所も面々にも感謝に気持ちでいっぱいだ。地域社会に貢献する青年会議所の使命が、この植樹会では地球の命を守るといふ人類の平和への働きとなっている。

明日の植樹をしっかりとやろという意気込みで、全員が「しっかりと・しっかりと・しっかりと」とシュプレヒコールを叫ぶ。

今年もまじえる会のメンバーが参加してくれた。会長の谷さん、河野さん、奥村さん、鈴木さん、それに小樽の参加が初めてという野々部さんが登壇する。いつものことながら、まじえる会の皆さんの植樹に対する情熱と宮脇先生を慕う気持ちが伝わってくる。まじえる会の皆さんは小樽の植樹によく来て下さる。きっと小樽が大好きなのかもしれない。すっかり顔なじみとなって家族の一員となり心も打ち解ける思いだ。

今年もメダカのコタロウ劇団のフレッシュな若者が出席して、前夜祭を華やかにしてくれている。劇団の代表からメダカのコタロウ劇団の活動が報告される。子どもたちの喜ぶ顔が見るのが何よりも楽しくて公演を続けているのだ。そして地球の環境に関心を持つ子どもたちに育てて欲しいと、全国の学校を巡回しているようだ。自己紹介の声も明るくハリのある声で、前夜祭が一段と盛り上がっていく。

今回の植樹祭では20種類の木が植えられる。植樹指導の時、宮脇先生は主な木の名前を3回唱えさせる。それに合わせて、自己紹介も自分の名前をフルネームで3度言うのが通例になってきたようだ。

北海道千年の森のメンバーも名前を3度言いながら自己紹介をする。宮脇先生の前に立つと誰もが緊張するが、それは常に本物を求め真摯な先生の姿勢に打たれるからだ。私山川もいつも“心地よい緊張感”を感じる。

植樹祭のマウンド造りは副理事長の荒木さんが担当だ。今回も苦労はあったようだが、荒木さんが話すと、苦労が深刻に聞こえない人徳が感じられる。札幌の田中さん、島牧の杉山さん、それに前夜祭には参加できなかったが、蘭越の渡辺さんにニセコの横山夫人、そして小樽の井形夫妻は、北海道千年の森になくってはならない生え抜きの人材だ。





熊沢歯科のメンバーが登壇する。熊沢先生を中心によくまとまっていて、千年の森の植樹祭ではチラシ作成からポスターの作成、そして宮脇先生の講演のマニピュレーターとして活躍してくれる。若い女性のスタッフがいるだけに受付業務も引き受けてくれる。



植樹祭の計画立案と会計・渉外と一手に引き受けて頑張ってくれる市川さんの司会で、最後は誰の発案か知らないが『ふるさと』の歌を合唱することになる。素晴らしい発案だ。

3：11の大震災以来、人の絆の大切さと自然への畏敬、そして故郷の大切さが再認識された。そこで植樹祭に参加した全員で『ふるさと』の歌の合唱が住吉神社の境内にこだまする計画なのだ。

前夜祭は、その『ふるさと』の歌の練習を兼ねて中村理事長の手話で歌うことになった。中村理事長はライオンズの仲間とバンドを組んで、よくスチールギターを演奏する。その音楽的センスがあって、手話を交えての振り付けも素晴らしい。二回練習をして本番となった。前夜祭に出席した全員が歌う『ふるさと』の歌は、遠く東北の故郷を失った人への思いもあって感動的だ。この感動を明日の植樹祭に繋げていくのだ。

5. 船上山の植樹祭

7月22日、いよいよ植樹祭当日の日がやってきた。空は曇っているが心は晴天だ。さすが住吉神社の植樹祭だけあって、雨は大丈夫、降らないようだ。絶好の植樹祭日和となった。

今年もリーダー講習会から始まった。リーダーはベテランが多く、いつもよりはスムーズに行われていく。それにしても、宮脇先生の指導はベテランをも緊張させる。



一本一本の苗木には生命があって、この小さな苗木が大きな大きな木に成長していくのだ。それだけに苗木を持つのも、植えるのにも愛情をこめて丁寧にやっつけていかなければならない。リーダーとして木を植える手順も大切だが、一番大事なことは命のある苗木を植えることへの精神的な心構えだ。

まず高木・中木・低木の木の名前を覚える。マウンドの土がよく混ざり合っているようだ。苗木を水に付けて準備する。シャベルを使っての穴掘りは、土を上にする。苗木を取り出す時は決して木を持たないで、根っこの部分を掌に乗せる。土をかぶせ、そっと柔らかく抑えて植える。

宮脇方式の特徴は藁を敷くことだ。この藁の役目も初めての参加者に知ってもらいたい。藁が飛ばないようにと杭に縄を張る。作業の途中で今植えたばかりの苗木を踏んだりしないように注意をしなければならない。あとはシャベルなどを洗ってから水をかけて終わりとなる。

社務所のホールには大勢の参加者が待っている。宮脇先生の講演が始まる。残念なことにマイクの声が聴きにくい。しかし、スクリーンの写真が補助してくれる。

今回は住吉神社の裏山なので、正に鎮守の森造りだ。日本において神社に付随して参道や拝所を囲むように森林がある。住吉神社の船上山にも老木が森を造っていた。星野宮司はその老木を倒して、新しく宮脇方式で広葉樹林を育てるのだ。



宮脇先生の講演は、これまでの日本各地の森づくりだけでなく、広くアフリカ・アジア・中国と世界に木を植えてきた実績が記録写真で写しだされ、参加者の感動を生む。今何故木を植えるのか。無残に荒れた山々や牧草地に変わり果てた森林の姿。現代社会は森林を破壊して成り立っていることがよくわかる。そして、そのことが地球を危機に追いやっている。本物の森を造ることが未来の子どもたちのためにと先生は声を高くする。



植樹はその土地に合った潜在自然植生に基づかなければならない。本物の森を造るのだと繰り返し宮脇先生は強調する。

東日本大震災は津波の恐ろしさを全世界の人に教えてくれた。全世界の目は東北の復興がどうなるかに注目が集まっている。まずは瓦礫の撤廃だ。瓦礫が山のようになっているのは復興の兆しも感じられない。

その瓦礫を宮脇先生は一か所に集め、その瓦礫の上に防災林を造る計画を考えた。すでに宮城県では実行に移している。誰が見ても素晴らしいアイデアだと称賛する。宮脇先生の植樹に対する思いが、ようやく東北大震災で被害地となった人たちに伝わっていくように思えた。

更に、宮脇先生はこの小樽の植樹祭を世界に発信していこうと呼びかける。地球儀を縦に見ないで横に見ると、北海道は決して北の僻地ではないという。世界の主な国の大都市は北海道と緯度を同じにしているのだと言う。小樽での植樹の成功は世界の国を救い、地球を守ることになるのだと言う。私は宮脇先生の講演をもっともっと多くの人たちに聴いてもらいたいと思った。特に政治家をはじめ、世の指導者たちには是非聴いてもらいたいのだ。

講演の感動を心に秘めて植樹に向かう。社殿の前に班ごとに整列して、ここで住吉神社の宮司に安全と成功を祈念しての祝詞をいただき船上山に向かう。大人も子ども老若男女が入り混じっての植樹祭だ。正にまじえる会だ。

班ごとにマウンドに集まってリーダーの指導を受ける。今年も子どもたちの姿が見えて嬉しくなる。奥沢少年野球の低学年チームも監督と一緒に参加している。子どもたちには、ただ木を植えればいいと言うだけでなく、命のある苗木を植えていることを知ってもらいたい。きっと、分かっていると思う。





どのチームも順調に作業が進められていく。汗ばんだ顔を上げると小樽の港が一望できる。船上山の高さは80メートルだと言う。ここなら60メートルの大津波がやってきても大丈夫だ。作業は次々と完成していく。いつもの手順で立札に名前を書いて、グループごとに記念写真を撮る。



船上山から下山して神社に本殿の前に勢ぞろいする。今度は、参加者全員で写真を撮す。「千年の森～」と口ずさむと笑顔になって写る。

そして、全員で『ふるさと』の合唱だ。中村理事長は二回手話の練習をして、前日のリハーサルも終え、本番の大合唱となる。まるで映画のロケーションのようだ。



最後にNPO法人教育プラットフォーム北海道の木下理事長より挨拶がある。短い簡潔な挨拶に大拍手が起きる。

予定より時間をオーバーしての食事となる。誰もが満足そうに社務所に向かう。そこには政寿司さんの大好評の“いくら&さけの特大おにぎり”が待っている。住吉神社提供の“三平汁”も特別に美味しい。初めて三平汁を食べた人が「あっさりしていて食べやすく美味しかった」と感想を述べていた。



三々五々神社の境内での昼食となる。今年の住吉神社の船上山の植樹祭も好天に恵まれ、美味しいご馳走を食べて散会となった。

